

なくした銀貨のたとえ

ルカ福音書15:8-10

15:8 また、女の人が銀貨を十枚持っていて、もしその一枚をなくしたら、あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜さないでしょうか。

15:9 見つけたら、友だちや近所の女たちを呼び集めて、『なくした銀貨を見つけましたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。

15:10 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 羊と銀貨の違いはどこにありますか。
- (2) 私たちの罪過の責任はどこへ行ったのですか。
- (3) 神は、なぜ、悔い改めた私たちに対してこごとを言わずに、喜んで握りしめて下さるのですか。

【解説】

(1) かけがえのないもの

また、女の人が銀貨を十枚持っていて、もしその一枚をなくしたら、あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜さないでしょうか。(8節)

ある女の人、多分貧しいやもめ暮らしの婦人であつたであろう。この人が銀貨十枚を持っていた。ここで銀貨と言われているのは、ギリシャのドラクマという貨幣のこと。ローマの貨幣ならばデナリにあたる。1ドラクマは1デナリ、価値においては同じであつて、当時の労働者の1日分の賃金に当たる。

当時の風習として、銀貨を十枚綴り合わせて、婦人が髪飾りや、首飾りにすることがあつた。これは母親の形見かなんかの銀貨の首飾り、あるいは髪飾りといった装飾品であつた^{かたみ}と考えることもできよう。

銀貨十枚でできている首飾り、これはひとつが欠けると半端^{はんぱ}になって用をなさない。そのひとつがないと、全部が役に立たないものになってしまう。この銀貨の首飾りが母親の形見だとすれば、これはかけがえのないものである。

(2) 物質のような心にも

羊の場合とこの銀貨の場合とは、はっきり違っていることがある。羊の場合は生き物である。しかし銀貨の場合は生き物ではない。物質である。生きた羊のように鳴きもしない。

羊の場合は鳴き声を頼りに捜せるが、銀貨ではそういうわけにもいかない。見つけるためには、捜す側の行動だけが頼りである。失われた人間の霊的状态はこのようなものである。霊的に死んでいるから、聖霊によらなければ、自分が失われた状態にあるということにすら気づかず、まして神を求めすることもできない。この女が手にしたあかりは、まさに聖霊の働きを暗示するものである(エペソ1:17-19)。

イエスがわざわざ「2つのたとえ」を語られたところにそういう意味があると思われる。羊の場合は、自分が迷っている状態をある程度意識してさまよっている。しかし銀貨の場合はまさに物質で、何も感じない。しかし、神はそのいずれに対しても追いかけておられるということ^はを、この銀貨のたとえで、私たちは知る。

私たちはこの銀貨のたとえを学ぶことによって、神の愛はこの銀貨のように、全然意識を持たない、死んだ物質そのもの^はのような人間の心に対しても、なおこれを追いかけるものであることを知る。

(3) あかりをつけ、家を掃いて

なくした銀貨はどこかにある。《あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜さないでしょうか》と、ここに《念入りに》と言われている。

掃除する時、あらゆるものに注意する。一枚のぼろ布、一本の棒きれ、そういうものまでも見逃さず、1つ1つあらためてゆく。《家を掃いて》とあるように大掃除である。

《あかりをつけて》神はキリストというまことの光を、この暗き罪の世に送ってくださった。

《すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた》と、ヨハネ福音書1章9節にある。



キリストは光である。このキリストがおいでにならなければ、何が迷っているのかわからない。真っ暗である。私たちがまず、自分は迷っているもの^だということ^を悟らされるのは、このキリストの光に接してである。このキリストの光に照らされてはじめて、自分というものがどうい^うものかわかってくる。

《あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜さないでしょうか》

私たちが自分自身のことに注意を払わないでいても、神様の方は、愛の注意深さをもって導いて下さっている。

(4) 見つけた喜び

見つけたら、友だちや近所の女たちを呼び集めて、『なくした銀貨を見つけましたから、いっしょに喜んでください』と言うでしょう。(9節)

ここでも羊の場合と同じように、見つけた者はただ喜んでいる。

なくしたものが見つかったという喜びがある。同じ銀貨1枚でも、見つけた時の喜びは違う。

私のような罪人、神に逆らい、自分勝手にさまよっていた者、それを責めず怒らず、どこまでも愛をもって追いかけて下さる神様、ひとことも、こごとを言わず、ただ喜んで手を差し伸べて下さる。

この女の場合も、一切の不注意

は自分が負って、なくした銀貨をただ喜んで握りしめる。これが神の私たちに対する愛の心である。私たちの罪の責任、迷いの責任、愚かさの責任は、みんな神様の方で負って下さって、みなそれをひとり子イエス・キリストの十字架にかけて、われわれの側には何もかけられない。

Ⅱコリント5章18-19節にそのことがはっきり言われている。

これらのことはすべて、神から出ているのです。神は、キリストによって、私たちをご自分と和解させ、また和解の務めを私たちに与えてくださいました。すなわち、神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ、違反行為の責めを人々に負わせないで、和解のことは私たちにゆだねられたのです。

その罪過の責任、これを私たちの側にひとつも負わせない。その責任はどこへ行ったのか。それはⅡコリント5章21節に、続けて言われている。

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方^にあって、神の義となるためです。

(5) 責めはすべてキリストに

私たちが問われるべき罪の責任、過ちの責任、迷いだした責任、その愚かさの責任は全部、神の子イエス・キリストにかけられた。それがあのキリストの十字架上で受けられた「深刻な死の苦しみ」である。すなわち神はご自身の側にその責任を負って、私たちを1から10まで手放しで赦して下さった。何1つ、私たちに責任を負わせない。これが神の愛(アガペー)である。

銀貨のように失われてしまっているこの罪人、もう滅びてしまっているような者、その者をどこまでも追求して下さる。これを見つけたらやまない愛の熱心をもって捜しだし、ただ喜んでこれをご自身の手にしっかり握りしめてくださる。もう再び失わない。

その確かな握り締めをもって、私たちを握ってくださる。神が用意しておられる神の国の座席にしっかりと置いて下さる。この十枚の中の1枚の場にしっかりと置いて下さる。「キリストの愛の責任」においてこれを全うして下さる。

父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。わたしが天から下って来たのは、自分のところを行うためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行うためです。わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。

事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。(ヨハネ6:37-40)

あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」(10節)

なくした銀貨を見つけたことは、なくしたことのない9枚の銀貨よりも大きな喜びをもたらした。神にとっても同じである。へりくだって、自分が失われた状態にあることを認める《罪人》は、神に喜びをもたらす。